

佳作

大きな存在

岡澤 菜々

私は小学生の頃、神奈川県の小学校に通っていた。その学校は、一組四十人の四クラスで、歴史のある学校だった。その校庭のど真ん中に大きなくすの木が一本立っていた。私はそのくすの木が大好きだった。くつついていくとくすの木から力をもらえるような、どこか落ちつく様な気がした。辛くなった時や腹が立った時はいつもくすの木と一緒にいた。何十年も校庭のど真ん中にあるくすの木は、私にとって人生の先輩の様な、どんな感情でも受け止めてくれる存在だった。

小学校三年の夏休み。私は沖繩にある小さな小学校に転校することになった。母と荷物を取りに学校へ行く。荷物を取り、担任の先生へのあいさつを終えて校舎を出た。そこには、いつもと変わらないくすの木が立っていた。母と一緒にいたからだろうか、私はくすの木にきちんとお別れすることができなかつた。正門を出て振り返ると「元気でね。頑張つて」とくすの木が言っているような気がした。くすの木に背中を押された気持ちになりながら学校を離れた。

沖繩の小学校は自然が豊かで空気がおいしい場所だった。しかし、校庭を見ると、どこかもの足りない感じがした。授業の時間に自然の勉強をするために学校の外に出た。そこである一本の木と出会った。「ガジュマルの木」だ。キジムナーという妖精がいると言い伝えられている、沖繩ではよく見かける木だ。くすの木と少し似ているが、くすの木よりも

ずっと長生きしているような感じで秀囲気が違った。でも、くすの木の様に力がもらえるような、どこか落ちつくようなところがあった。この日から、落ちつく場所がくすの木からガジュマルの木に変わった。しかし、学校の外にあるため、くすの木の様に学校に行けばすぐに会えるわけではなかった。そこは街灯が少なかつたため、小学生だった私は学校帰りの夕がたに行くのには、そう簡単ではなかつた。授業で見たきり、ガジュマルの木に一回も会えずに小学校生活が終わつた。

中学生に上がり、他校からも生徒が集まってくる中、私は不安だった。新しい環境・着慣れない制服・人間関係など不安でいっぱいだった。そしてあと一つ。くすの木もガジュマルの木も同じぐらいの大きな木もそこにはなかつた。一人でも落ちつく場所がなかつた。不安を抱えながら私の中学校生活が始まつた。勉強や部活動で忙しかつた私は、大きな木

の存在を忘れていた。そんな中で出会ったのは一人の先生だった。体が大きくて休み時間や授業の最後にギターの弾き語りをする先生だった。三年生では私の担任の先生でもあった。特に深いかわりはないが、先生の言うことは一つ一つの言葉に重みがあり、将来のことや人間関係などで考えさせられた。ギターをやるうと思っただのもこの先生がきっかけだ。今思えば、この先生がくすの木やガジュマルの木のような存在だったのかもしれない。

先生にサポートしてもらいながら迎えた高校入試の合格発表当日、私は不安でいっぱいだった。朝見たテレビでの占い、かに座のランキングは十二位。合格発表直前にしっぽの切れた猫を見た。合格発表の時間が近づくにつれて不安がつもっていった。自分の番号を見た時、今までにないぐらいうれしかったのを覚えている。

高校入学。中学生の頃の不安とは違い、合格した安心感でいっぱいだった。その高校の正門の横にはガジュマルの木があった。小学校を卒業して以来見ていなかった私はうれしかった。そして、これからはずっと見ることができると思った。

現在私は高校三年生。この三年間で大切な友人にも出会い、学校生活や部活などでも壁を乗り越えてきた。そして今、進路について悩む時期にいる。保育士という夢はあったがどんな保育士になりたいか、まで考えていなかった。ある時、将来どんな人生を送りたいかを考える授業があった。その時、思った。くすの木やガジュマルの木の様な大きさの存在になりたい。子どもたち全員とまではいえないかもしれない。一人でも多くの人に「大きな存在だった」と思われるような保育士になりたい。そして今、一人でも多くの人に大きな存在だと思われるような人間にな

るために頑張っている。

今日も、ガジユマルがある正門を通り一日が始まる。